

三河地震に襲われた日

太平洋戦争の真っただ中の昭和20年1月13日、それは突然起こりました。皆が寝静まる午前3時38分、ドーンという衝撃でたくさんの人が目を覚ましました。しかし、その衝撃は空襲によるものではなく、地震によるものだったのです。



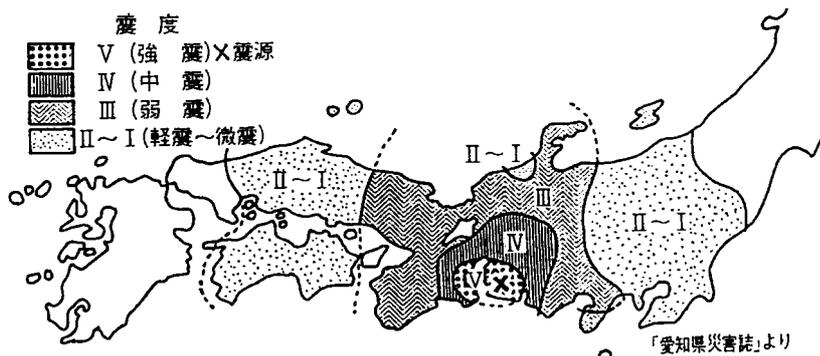
三河地震の概要

発震時 昭和20年(1945年)1月13日午前3時38分ごろ
震源地 渥美湾北岸(北緯34度7、東経137度2)
震源の深さ 0(ほぼわめて浅い)
規模 マグニチュード 7.1
有感半径 690 km
被害 愛知県下では、矢作川下流域の幡豆郡・碧海郡方面を

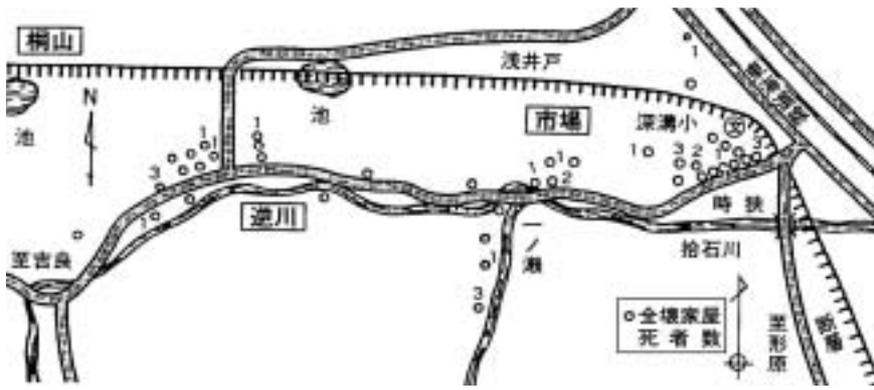


地震発生翌日の朝日新聞の記事。当時は約1か月前に発生した東南海地震の余震であったと報じている。

今からちょうど60年前の1945年(昭和20年)、渥美湾を震源とするマグニチュード7.1の地震が発生し、三河地方に大きな被害をもたらしました。この地震が三河地震です。しかし、当時は戦時中であつたため報道管制がしかれ、被害状況については正確な報道がされませんでした。また、調査記録も極秘扱いされ、戦後の混乱の中で忘れられていったのです。



中心に大被害が集中。静岡県の一部にも小被害があった。死者約2000人、全壊家屋は約5000戸。震度と震域 東は関東から西は中国、四国地方まで身体に地震動を感じたが、規模としては大きくなかった。(左記参照)



町内での三河地震の被害は、震源地に近い市場と逆川に集中しました。その被害状況も地域によって差があり、深溝断層の北側では全壊家屋が2戸、死者1人だったのに対し、南側では全壊家屋が38戸、死者28人という状況でした。また、火事による被害も多くありました。ある家では、火

て助けに行けなかったのです。三河地震の被害を今に伝えるものとして、前震と余震のデータが残っています。データを見ると、余震が数多く発生していたことが分かります。有感地震だけに限っても、13日から19日までの1週間で約1時間に1回の割合で起きています。特に三河地震が発生した13日は、1日



がついた家に挟まって抜け出せない子がいました。しかし、周りも自分が助かることで一杯であったため、助けに行ける人はほとんどいませんでした。さらに、遠くから助けに来た人も、道が狭いうえに倒れた建物や木などが邪魔をし

三河地震の前震・余震

日	有感地震				計	無感地震	
	大きい	やや大きい	やや小さい	小さい		人が感じないもの	総計
11日	0	1	1	4	6	6	12
12日	0	0	0	6	6	6	12
前震合計	0	1	1	10	12	12	24
13日	0	2	2	87	91	190	281
14日	0	3	5	25	33	78	111
15日	0	1	1	9	11	62	73
16日	1	0	2	6	9	42	51
17日	0	0	1	1	2	37	39
18日	0	0	0	7	7	28	35
19日	0	0	1	6	7	32	39
余震合計	1	6	12	141	160	469	629

で91回も地震が発生しており、これは約15分に1回の割合で余震が起こっていたことになりました。三河地震の怖さは、地震そのものによる被害はもちろんですが、発生後も「いつ余震が起きるか分からない」という恐怖におびえながら、生活しなければいけなかったことです。



有感地震は、震央からの最大有感距離によって4段階に分類しました。

分類	最大有感距離
大きい	300 km以上
やや大きい	200 ~ 300 km
やや小さい	100 ~ 200 km
小さい	100 km未満

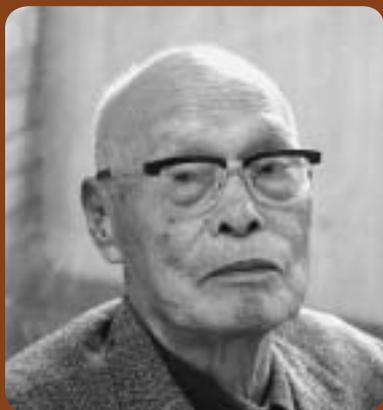


なぜ三河地震はここまで大きな被害をもたらしたのでしょうか。三河地震の約1か月前、昭和19年12月7日に発生した東南海地震では、マグニチュード7.9と地震のエネルギーとしては三河地震の40倍もの大きさだったにも関わらず、死者は約半分という少なさでした。

このような被害に大きな差が出た原因の一つとして、東南海地震は海溝型の地震だったのに対し、三河地震は直下型の地震であったことが挙げられます。海溝型は、おもに海域で起こるため、地上に大きな被害を与えることはありませんが、直下型は、おもに陸上に分布する活断層のずれによって

起きることが多いため、土地に大きな被害を与えたからです。また、発生した時間も被害に大きく影響しました。東南海地震は午後1時40分ごろと昼間に発生したため、迅速な対応ができ、多くの人が被害をまぬがれました。しかし、三河地震は午前3時38分ごろと真夜中に発生したため、寝ていた人たちが多く、対応が遅れたために家屋や家具などの下敷きになって圧死してしまつた人が数多くいたのです。

体験者は語る



当時豊坂国民学校に勤めていた齋藤巖さん

昭和19年、日本は太平洋戦争のさなかでした。当時は、新聞・ラジオで状況を知ることが唯一の情報手段で、全体の状況を正確に知ることはできませんでした。

12月7日の午後、畑へ子どもたちと麦をまきに行きました。突然、変な目まいがして、子どもたちもげんな顔で私のほうを見ていました。その時、これは地震だと直感しました。そこで、すぐに学校に帰ることにしました。堤防には亀裂が入っており、学校の職員室では物が乱雑に倒れ、校舎が波打つのを見たという先生もいました。情報の入らない私たちには被害の程度を知ることができませんでしたが、子ども3人が生き埋めになり死亡したことを後で聞きました。

そして、その1か月後、悲劇は突然訪れました。昭和20年1月13日の未明、ドンと体を打たれるような衝撃で目を覚ましました。裸電球がゆらゆらと揺れたかと思うと、パッと消えてしまいました。やっと外へ出ると学校の南側が大変だという知らせがありました。消防団を招集するため、けたたましく打たれる半鐘の音が今も耳に残っています。木々の茎が揺れる音で余震を感じ、空にはB 29がブーンと音を立てて飛んでいました。その日の夜は、ドンという響きが起き、ピカリと青白い光が三ヶ根山で光ったのを覚えています。これは、まさに生き地獄でありました。深溝国民学校では、4人の児童が地震の犠牲となりました。

地震が収まると、高等科の児童を引き連れ、逆川へ後片付けに行きました。逆川の峠から見ると、断層が峠から谷田を横切り、山を通り、宮迫峠のほうに走っておりまして。田んぼを横切る地点では、亀裂が大きな口を開けていました。

そして、最も大きな原因として、家屋が弱かったことが挙げられます。当時の家は、養蚕のため、風通しをよくする必要があり、壁や筋交いをなくした、頭でっかちな家が多く、地震に弱かったのです。決して丈夫とはいえない家にわずか1か月の間に大きな地震が2度も襲ってきたのです。東南海地震で傾きかけた家の修理が終わる前に三河地震が発生して倒壊してしまっただけという家が多くありました。1度の地震には耐えることができて、2度目には耐えられなかったのです。



では、三河地震から助かった人とそうでなかった人との差は何であったのでしょうか。助



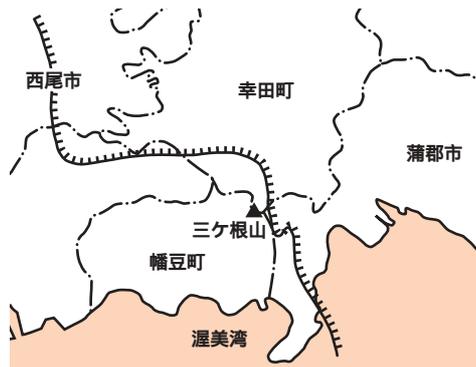
かった人にお話を伺ったところ、次のようにおっしゃっていました。「靴は土間の隅にあげておき、服は自分の寝た布団の上に置いておいた。地震で寝込みを襲われたが、布団の上の服を着て、靴をはいて外に逃げた」つまり、助かった人は、靴や服など避難するのに必要最低限なものを、すぐに持ち出せる場所に置いていたのです。そのため、思いもよらない真夜中の地震にも、必要最低限なものだけを持って、すぐに外に避難することができたのです。

これは、私たちの日ごろの備えにも通じるところがあります。もし、今大地震が起きた場合、靴や服が手もとにあれば、どんなに早く避難ができるでしょうか。

この三河地震によって発生したのが深溝断層でした。深溝断層は、渥美湾内の中央構造線付近から大きく曲線を描きながら幸田町深溝を経て西尾市志籠谷町まで続く約28kmの逆断層で、三河地震発生から現在に至るまで、地震に対する教訓をあたえてくれる貴重な文化財の一つです。断層の地表の最大落差は2m、最大横ずれは1m余りです。



昭和20年当時の深溝断層



深溝断層位置図

三河地震による住家全壊数は、約5000戸もあり、幸田町深溝、逆川、蒲原市西南部(旧形原町)、吉良町北東部(旧横須賀村北東部)、西尾市東部(旧西尾町東部と旧三和村)は特に全壊率の高い地域でした。これらの地域は、すべて深溝断層と副断層に沿う地域でした。



三河地震が教えた 地震の恐ろしさ

三河地震は、今から60年前の地震です。現在は当時に比べる家が丈夫にできています。三河地震と同程度の地震が起きて、被害はあまりないと思われがちです。しかし、実際に近年発生した阪神・淡路大震災、新潟中越地震などをみると、被害はけっして小さくはありません。つまり、現在の家をもつてしても、自然の脅威の前で

はあっけなく崩れてしまうので

この地域では、近い将来、駿河湾沖を震源とする東海地震と東南海地震の発生が予想されています。非常時に備えて、避難場所の確認や災害時の連絡体制、家具の転倒防止などやるべきことはたくさんあります。その中で、最も大事なことは、地震の本当の恐ろしさを過去の教訓から学び、それを後世に語りついでいくことではないでしょうか。

安城市藤井町にある「三河地震追憶之碑」には死者77人の名前とともにつぎの文章が刻まれています。

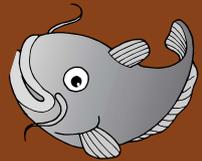
「昭和二十年一月十三日未明、突如として起こった三河地震は、藤井住民の尊い生命財産を奪った。この大惨事は藤井住民の眼に痛恨として、今もなお、強く焼きついている。

当時、藤井は百十七戸であったが、数度の上下動と共に一瞬にして殆どの家屋が倒壊し、住民はその下敷きとなった。暗闇の中で互いに安否を確かめ合いながら、屋根瓦を素手で打ち破り、戸外へ這い出すことができず、引き続く轟音や閃光。次々に襲い来る余震に脅かされながら、住民は一丸となって死傷者の救出や手当てに奔走し

文化振興展 深溝断層 三河地震の遺した爪痕

三河地震の大きな爪痕である深溝断層を中心に、三河地震のメカニズムや地震のときの人々の状態など、近年の調査で明らかとなったことを紹介します。

と き ●12月3日(土)～11日(日) 午前10時～午後5時
ところ ●図書館ギャラリー
入場料 ●無料



地震体験コーナー

地震体験車「なまず号」で三河地震の震度が体験できます。

と き ●12月10日(土)
午後2時～4時

ところ ●町民会館センタープラザ

参加料 ●無料

関連行事 講演会

と き ●12月10日(土)
午後1時30分～3時

ところ ●町民会館 大会議室

演 題 ●三河地震に学ぶ

講 師 ●林能成氏
(名古屋大学災害対策室)

定 員 ●50人 *先着順

入場料 ●無料

た。血まみれの労力にも拘わらず絶命するものが続出し、まさに、この世の生地獄そのものであった。

しかも敗色濃き戦火の末期にて、三河地震の惨状は公表されず、住民は物心両面にわたって、筆舌に尽し難い惨苦を嘗めた。

爾来、30有余年、住民の自力によつて復興を見た今日、往時

の惨状を偲び、帰らざる災没者の冥福を祈ると共に、この実情を永く後世に伝えるため、ここに藤井町住民の総意により、この碑を建立する。

昭和五十二年十一月

安城市藤井町

(写真・イラスト提供 名古屋大学地震火山・防災研究センター 撮影 原田三郎氏)